

東海地域における土器編年に基づく 弥生・古墳時代の洪水堆積層 (朝日 T-SA 層・大毛池田層)と暦年代

赤塚 次郎

●キーワード：洪水痕跡 (archaeological flood evidence), 弥生・古墳時代 (Yayoi/Kofun period),
炭素 14 年代測定 (radiocarbon dating), 東海地域 (Tokai area)

1. はじめに

弥生時代から古墳中期までの暦年代について、濃尾平野における土器編年を基本にして、2003 年から 2007 年にかけて名古屋大学年代測定総合研究センターとの共同研究を実施してきた。また愛知県埋蔵文化財センターが実施した愛知県清須市の朝日遺跡発掘調査とその成果を踏まえて、ここでは特に弥生時代中・後期、古墳時代前・中期の狭間に見られる洪水性の堆積層を中心に、その年代観と問題点を踏まえ、弥生時代から古墳中期までの土器編年に基づく暦年代を整理しておきたい。なお濃尾平野の土器編年と AMS 較正值の具体的な数値等については、日本文化財科学会第 26 回大会研究発表要旨集を参照していただきたい (赤塚：2009b)。

2. 愛知県清須市朝日遺跡の調査成果と 弥生～古墳時代の暦年代

2.1. 朝日遺跡の土器編年と暦年代

愛知県清須市・名古屋市西区に所在する弥生時代の集落遺跡である朝日遺跡では、土器付着炭化物および草本性の炭化物の AMS 較正值を継続的に計測してきた。(赤塚：2009a) 以下その概要をまとめておきたい。

まずは朝日遺跡全体の景観を形作った弥生中期前葉の「朝日式期」の時期についてであるが、AMS 較正值が

ほぼ 400calBC-360calBC に集中し、おおむね朝日式期が前 4 世紀前半期を中心とする時代である点が明らかとなった。遅くとも濃尾平野低地部では中期の開始時期を紀元前 400 前後という年代値に置く事ができる。この年代観はすでに国立歴史民俗博物館の年代測定研究グループが報告されている研究成果と矛盾するものではない (藤尾：2009)。また山本直人によって東海・北陸地域の縄文から弥生時代の年代が整理されており、檜王式期の開始時期を BC500 ごろとする見解とも整合性がとれる (山本：2007)。

次に中期後葉の高蔵式期であるが、200calBC から西暦 1 年の間にまとまりが見られる。後期中・後葉の山中式期の土器付着炭化物による分析成果は 100BC-100cal AD の間に集中し、紀元前後におよぶことがわかっている。しかし朝日遺跡での共同研究成果を踏まえて、藤尾らは「IntCal04 と日本の樹木から作った較正曲線に照合した結果を比較…、貝田町式 3 期と高蔵式は 50 年ほど下限がずれており、IntCal04 が古く出ていること、さらに山中式から廻間 1 式古は下限が 100 年ほど古く出ていること」とし、「朝日遺跡の中期後半から末では 50 年、後期一杯は 100 年ほど、IntCal による較正結果が古く出る地域効果の可能性」が指摘されている (藤尾・尾寄：2009)。したがってこうした諸点を踏まえ現状では、高蔵式を前 2 世紀後半から前 1 世紀ごろ、八王子古

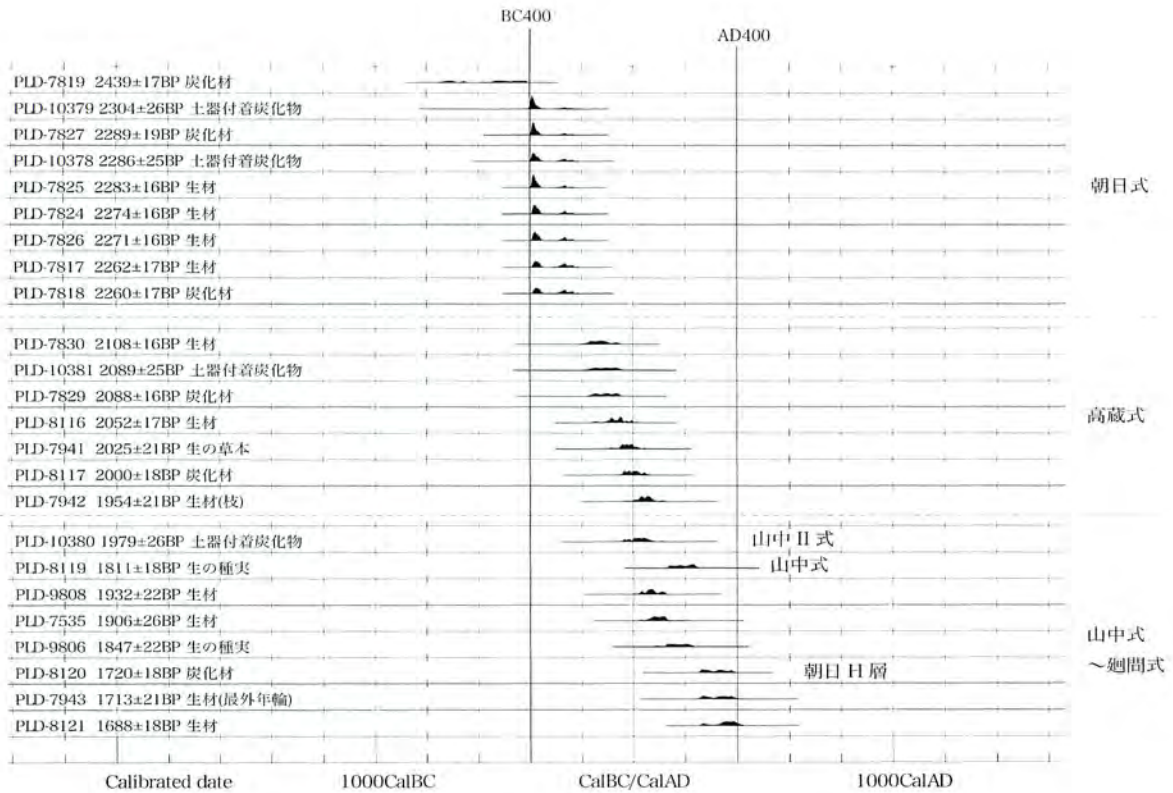


図1 較正暦年代(朝日遺跡)赤塚2009aより

Fig.1 Calibrated ages in Yayoi period excavated from Asahi site

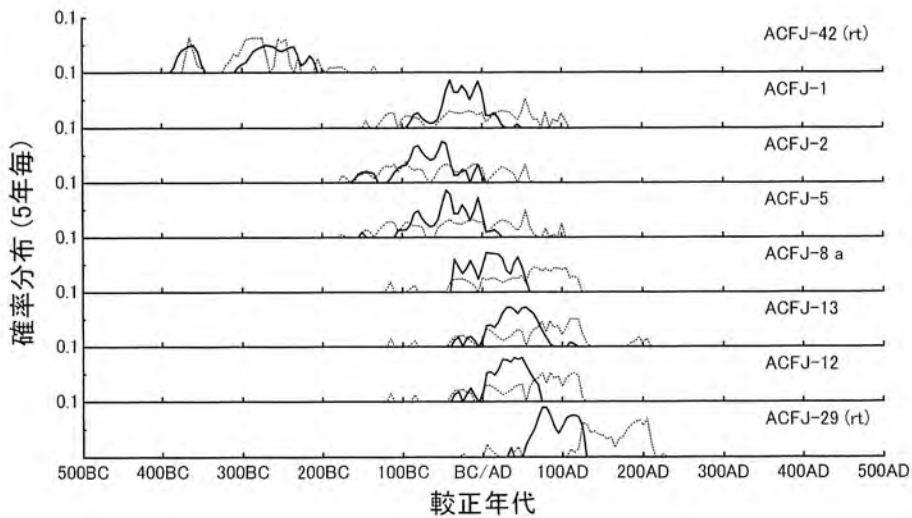


図2 IntCal04(実線)と日本産樹木(破線)による較正暦年代比較(朝日遺跡山中式)藤尾・尾崎2009より

Fig.2 Calibrated ages comparison (The late of Yayoi period)

宮式を前1世紀を含みながら西暦1世紀前半期, 山中式を1世紀後半から2世紀前葉と想定しておきたい(赤塚: 2009b)。

2.2. 「朝日 T-SA 層」について

朝日遺跡の調査において, 逆茂木遺構をはじめ谷地形,

一部の環濠等を埋め尽くした砂層が確認されており, これらが高蔵期に勃発した大規模な砂層堆積である事がわかってきた。そしてその現象が朝日遺跡に致命的な影響をあたえ, 集落景観が大きく変化していったものと考えることができる。結果的にこの現象を契機に, 弥生後期社会景観(集落規模の縮小・墓域や流路の変更等)へ変

貌していくことになる。さらに具体的にその時期を特定できる成果を得ており、発掘調査で判明している洪水性の堆積層（T-SA層）が高蔵式期の最末期段階に朝日遺跡を襲った出来事である可能性が高い。その砂層からの炭化物による分析結果から 95BC - 5 calAD を中心とした値を得ている（赤塚：2009a）。

こうした大規模な洪水性の砂堆積は愛知県下では一宮市八王子遺跡や稲沢市一色青海遺跡で確認でき、いずれも高蔵期後葉段階に勃発した大規模な洪水現象であった可能性が高い。同様な現象が奈良県唐古・鍵遺跡などでも指摘されており、さらにそれが列島規模に広がる可能性もある。その年代はおおむね前1世紀でも早い段階を

中心とした時期と推定でき、弥生後期社会景観を考える上で重要なキーワードとなる。

2.3. 廻間Ⅰ式前半期は西暦150年を含む

一宮八王子遺跡 SK73 の一括資料をもって廻間Ⅰ式期の開始を考える。名古屋大学年代測定総合研究センターとの共同研究成果からは、廻間Ⅰ式の付着炭化物の較正值は西暦1世紀に偏りが見られ、また廻間Ⅰ式中頃から後半期は1世紀後葉から2世紀前葉に集中する傾向が見られる。一方で廻間Ⅱ式末葉からⅢ式期にかけては220から260と280-320ADに値がまとまる傾向が読み取れる。小田寛貴らによって指摘されているように、廻間Ⅱ式中頃を境にして二つに大きく較正值が偏在することがわかる（小田ほか：2007）。前者は幾分古く値が出ている可能性を想定しておく必要がある。特に廻間Ⅰ式初頭段階の資料に付いては著しく古い値が出ており、やはり100年ほどの開きを想定したい。

さて、視点を変えて、岐阜県大垣市米野遺跡からは興味深い成果報告が公表されている。米野Ⅰ期に供伴する槽状木製品での年輪年代測定の結果では、2点の資料（ヒノキ）で一つはAD127年+20~30年、今一つがAD152年という値が出ており、両者ともおおむね150年前後の伐採年代が判明している（高田・光谷：2007）。米野Ⅰ期に所属する溝最下層資料であり、大型の槽形木製品を考慮すると所属時期は廻間Ⅰ式初頭段階にほぼ限



写真1 逆茂木を覆う砂層・朝日T-SA（朝日遺跡）

Photo 1 Sand bed (Asahi T-SA) cover the barricade of tree

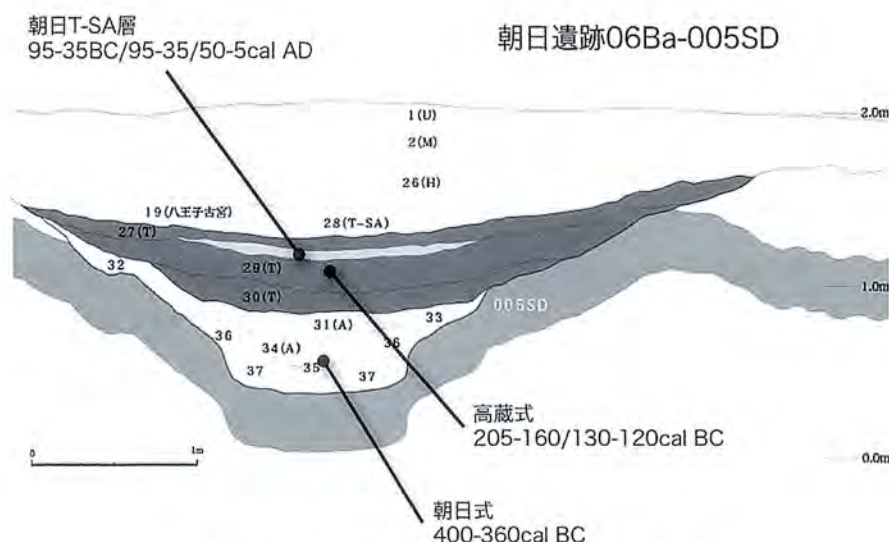


図3 朝日T-SA層断面図（朝日遺跡06Ba区005SD）

Fig. 3 Cross section of Asahi T-SA sand bed

定できるものと思われる。したがって廻間Ⅰ式期が遅くても150年には成立していた可能性が極めて高い。さらに石川県金沢市大友西遺跡のSE18からはAD169年という伐採年代と風巻Ⅱ式期の供伴を考慮すると、廻間Ⅰ式後半期が2世紀後葉を中心とした時期である事が推測できよう(赤塚：2003：2006)。現状では廻間Ⅰ式期後葉を3世紀代に置く根拠は見いだし難い。以上の点から総合すると、廻間Ⅰ式期が西暦2世紀第2四半期の中で登場し、おおむね2世紀後半期を中心とした時期を想定できることになる。それは小田寛貴らの前半期のまとまりが100年古く遡るという可能性と上手く整合性をもつようである(小田ほか：2007)。したがって廻間Ⅱ式期は3世紀前半期を中心とした土器様式の可能性が極めて高いことになる。

3. 古墳中期の洪水層

3.1. 「大毛池田層」について

一宮市大毛池田遺跡の調査成果では、古墳時代前期(廻間Ⅲ式～松河戸Ⅱ式期)の大規模な水田面を覆い尽くす砂層が確認されている。大毛池田基本層序第3層であり、報告では「褐色～黄褐色を呈する砂を主体とするシルト～極細粒砂からなる。初生堆積構造としてアンギュラー型のフォアセット葉理が確認できるところもあるが、全体に堆積構造の残りは悪く、塊状を呈するのがふつうである。…本層はその層相と下位層を削剥した痕跡がみられることから、洪水による短期間で堆積したものである」(鬼頭：1997)と位置づけられている。そして松河戸Ⅱ式後葉段階の良好な遺物が、その下位にて確認でき、宇田Ⅰ式期前葉段階で大規模な砂層堆積が存在した事が推測できる。この大毛池田層が古墳時代中期前葉段階に勃発した洪水層と考え、同様な堆積層が濃尾平野各地で確認できる。朝日遺跡(朝日Ⅴ層)や志賀公園遺跡、さらには矢作川中流域の遺跡群において、例えば豊田市郷上遺跡大溝を覆い尽くす砂層や沖積地から台地上への遺跡の展開なども呼応する現象とも考えることができる。いずれにしても大毛池田層の所属時期とその評価は、古墳時代を前半期と後半期とに二分する問題を含んでいるようにも思える。次ぎにその暦年代を考えてみたい。

3.2. 宇田Ⅰ式期の暦年代

名古屋大学年代測定総合研究センターとの共同研究から、宇田Ⅰ式期の土器付着炭化物のAMS較正值は、5世紀前葉から中葉に値がまとまる傾向が見られる。さらに宇田型甕Ⅱ類が417～441、418～441calADという値を考慮すると(菅野裕之ほか：2006)、宇田Ⅰ式期の成立時期は、5世紀前葉を定点にする事が可能となる。ところで宇田型甕Ⅱ類の主体が東山窯111号窯との供伴が見られるのであり(赤塚・早野：2001)、尾張型須恵器H-111が遅くても420年代には成立しているものと想定できる。なおH-111・H-48は陶邑窯TK216・ON46併行と想定されている。したがって宇田Ⅰ式Ⅰ段階の成立が五世紀初頭段階に遡る可能性が極めて高い。

さて松河戸Ⅱ式期については、西三河地域・矢作川中流域における豊田市水入遺跡での土器付着炭化物からの較正值を概観すると(鬼頭・赤塚：2005)、松河戸Ⅱ式期から宇田Ⅰ式期併行資料において340～430ADの年代値が報告されている。こうした評価は、宇治市街遺跡での年輪年代法と炭素年代法によって導かれている389年伐採年代と359～395ADという較正值(尾寄：2006)、供伴する韓式土器との関係から須恵器生産の開始を四世紀後葉段階まで引き上げる傾向と大きく矛盾しない。さらに奈良県佐紀遺跡SD6030上層での412年の伐採年代資料とTK73型式との関係を含めても整合性をもつものと思われる。繰り返しになるが、ここでは宇田Ⅰ式期の成立を遅くても五世紀初頭に位置づけておきたい。

したがって、大毛池田層を広域的な災害現象と捉え直し、所属時期を古墳時代中期前葉段階とし、おおむね西暦400年前後を想定しておきたい。

4. まとめにかえて

濃尾平野に刻まれた広域的な洪水性の堆積層を確認できる。一つは弥生中期後葉「朝日Ⅴ層」で、おおむね西暦に近づく前1世紀の早い段階と想定。あるいは列島規模での環境変動が背景に存在し、古墳時代への移行期でもある弥生後期社会景観への契機になった可能性も考えられる。二つ目は「大毛池田層」であり、おおむね西暦400年前後と想定。この年代はいわゆる古墳寒冷期を二分する時期に相当し(坂口：2008)、また列島の

多くの地域で早期・前期から継続する前方後円墳造営が一旦収束する時期に該当するようでもある。加えて大陸系の新しい文物・技術が導入された背景として、大きな環境変化に伴う地域社会そのものの変動を推定できるかもしれない。

最後に、廻間Ⅰ式期の開始時期・SK73小様式の成立を西暦150年以前として二世紀第二四半期の中に位置づ

け、卑弥呼が魏に使節団を送る三世紀前半期を廻間Ⅱ式期の時代と想定しておきたい。河内庄内式の成立はどうか。やら廻間Ⅰ式期より1段階ほど遅れるようだが、いずれにしる大和地域での庄内併行期の成立を、土器様式の併行関係を考慮すると、やはり西暦二世紀後半代にまで引き上げて考える必要がある（森岡・西村：2006）。

引用文献

- 赤塚次郎・早野浩二（2001）松河戸・宇田様式の再編。「研究紀要第2号」愛知県埋蔵文化財センター、pp.13-32.
- 赤塚次郎 2003「中部・近畿地方の弥生・古墳時代編年の現状と課題」第5回考古学シンポジウム発表要旨 pp.79-84
- 赤塚次郎 2006「東海系土器と東日本の墳丘墓」古式土師器の年代学 pp.319-327
- 赤塚次郎 2009a「朝日遺跡標準層序の暦年代」朝日遺跡ⅧⅢ 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第154集総集編 pp.134-137
- 赤塚次郎 2009b「弥生後期から古墳中期（八王子古宮式から宇田式期）の暦年代」日本文化財科学会第26回大会研究発表要旨集 pp.14-20
- 小田寛貴・山本直人・赤塚次郎・加納俊介・木野瀬正典・中村俊夫 2007「弥生終末期から古墳前期の土器に付着した炭化物の14C年代」日本文化財科学会第24回大会研究発表要旨集 pp.136-137
- 尾寄大真 2006「宇治市街遺跡下層出土の古墳時代遺物の年代測定成果」記者発表資料 京都府宇治市、国立歴史民俗博物館 <http://www.rekihaku.ac.jp/research>
- 鬼頭 剛 1997「基本層序」大毛池田遺跡 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第72集 pp.8-9
- 鬼頭 剛・赤塚次郎 2005「AMS14C年代と考古編年」愛知県埋蔵文化財センター 研究紀要第6号 pp.1-11
- 菅野裕之・赤塚次郎・山本直人・中村俊夫 2006「須恵器出現期の土師器付着炭化物の較正年代」日本文化財科学会第23回大会研究発表要旨集 pp.108-109
- 高田康成・光谷拓美 2007「米野遺跡」大垣市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集
- 阪口 豊 2008「過去1万3000年間の気候の変化と人間の歴史」講座文明と環境 第6巻 歴史と気候 新装版 pp.1-12
- 藤尾慎一郎 2009「弥生時代の実年代」弥生農耕のはじまりとその年代 雄山閣 pp.9-54
- 藤尾慎一郎・尾寄大真 2009「朝日遺跡出土土器に付着した炭化物の年代学的調査」朝日遺跡ⅧⅢ 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第154集総集編 pp.138-148
- 森岡秀人・西村 歩 2006「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題」古式土師器の年代学 pp.507-588
- 山本直人 2007「文理融合の考古学」高志書院

Archaeological Two Flood Evidence from Yayoi Period to the Kofun Period in a Nobi Plain (Asahi T – SA Sand Bed and Ookeikeda Sand Bed)

Jiro AKATSUKA

Aichi Archeology Center

Archaeological two flood evidence can be confirmed from Yayoi period to the Kofun period in a Nobi plain. Asahi T – SA sand bed exists for the latter in Yayoi period from the middle. Ookeikeda sand bed exists between the middle from the first term of the Kofun Period.

The calibrated ages in archaeological two flood evidence is presumed from the AMS ^{14}C ages from Yayoi period to middle term of the Kofun period based on archeological age of pottery in a Nobi plain based on a joint research with Center for Chronological Research Nagoya University.

Ookeikeda sand bed was assigned to around A. D.400 years. Asahi T – SA sand bed was assigned to around the first century at B. C. .

A sample made the most of the thing that it was excavated by a master in Asahi site, Aichi Prefecture, Japan.